日遠の声調と清濁卓立表示について

中　澤　信　幸

キーワード：『法華経随音句』、声調、韻書、法華経読誦音、清濁卓立

要　旨

中世まで法華経読誦音を始めとした呉音の声調は、韻書のそれとは異なるものとして伝承されてきた。日遠は『法華経随音句』において正しい法華経読誦音を定めるために『古今韻会挙要』等の韻書を利用したが、その声調の基準についてはこれまで必ずしも明らかにはされてこなかった。本稿では韻書と伝統的な法華経読誦音との、声調の違いに対する日遠の態度を調査した。

日遠は基本的に伝統音の声点を韻書に合うように改変しているが、一部で伝統音の声調に従っている場合もある。また純粋に清濁を示すためにあえて伝統音の声調を保存したり、韻書の声調とも伝統音の声調とも異なる「空き間」を利用したりして、清濁卓立を行っている。これは巻末の「広狭」の表に見られる声調表示を捨象した濁点とともに、濁音表記の歴史を考える上でも注目してよい。

0　はじめに

法華経読誦音を始めとしたいわゆる呉音の声調が、中国の韻書の声調とは異なるものであるという指摘は、早く平安時代中期からなされてきた。そして中世に編纂された各種の法華経音義では、韻書とは異なる伝統的な読誦音の声調が示されている。

近世に入って、日蓮宗の僧である日遠は伝統的な法華経読誦音を韻書によって正そうとした。それが『法華経随音句』（元和6年成、1620、寛永20年刊、1643、以下『随音句』と略称）である。『随音句』においては『古今韻会挙要』（元・熊忠著、1297年成、以下『韻会挙要』）等の韻書をもとに、伝統的な読誦音の清濁や音形が積極的に改変される。ただし一部では伝統音のまま保留される場合もある。

ところが『随音句』では、声調に関しては必ずしも韻書と一致しない場合が多く見られる。この点が後世の日相を惑わす結果にもなったのであるが、この日遠の声調の基準については、こんにちまで必ずしも明らかにはなっていない。本稿は韻書と法華経読誦音との声調の違いに対する日遠の態度を通して、近世初期における呉音と韻書との関係

の一端を見ようとするものである。

1　韻書と法華経読誦音との声調の違いについて

法華経読誦音などの形で日本で伝えられた呉音と、中国で編纂された韻書に見られる漢字音とでは、もとになった言語の時代も地域も異なる。そのためこの両者では清濁・音形等で著しく差異が見られるが、特に声調については体系的に入れ違うことが、早くから指摘されてきた。

1.1　法華経音義に見られる記述

例えば平安中期の僧中算によって編纂された『法華経釈文』では、韻書の音と「対馬音」（呉音）とでは平声と上声・去声とが入れ替わることが述べられる[1)]。この頃には両者の声調の体系的な違いが、すでに気付かれていたことを物語る。

また近世初期の天台宗の僧、快倫の『法華経文字声韻音訓篇集』（慶長13年成、1608、慶長18年刊、1613）にも、同趣旨の記述が見られる[2)]。天台宗においては伝統的な法華経読誦音が受け継がれてきたが、この声調の体系的な違いに関する知識も受け継がれてきたのである。

1.2　韻書と法華経読誦音との違い

実際に法華経読誦音と韻書との声調を比較した結果、法華経読誦音の平声の約4分の3が韻書では上声・去声に対応し、法華経読誦音の上声・去声の約4分の3が韻書では平声に対応するという報告がある[3)]。

また『金光明最勝王経音義』『慈光寺本大般若経』『図書寮本類聚名義抄』等の呉音資料でも、韻書の平声が上声・去声に、韻書の上声・去声が平声に入れ替わる傾向が指摘されている[4)]。

つまり平安時代以来法華経音義等で指摘されてきたことは、現実の呉音・法華経読誦音でもだいたい当てはまると言ってよいのである。

2　日遠『法華経随音句』について

2.1　『随音句』と『韻会挙要』

『随音句』は心性院日遠（1572-1642）による上下2巻の法華経音義である。日遠はこれに先立つ慶長年間（1596-1614）に『文段経』という『法華経』の訓点本を著しており、『随音句』もこれをもとにしているという[5)]。

『随音句』では『法華経』本文で問題のある字を含む文を掲出順に掲げ、その字の音などについて議論している。いわば「巻音義」のような体裁を取っている。

『随音句』の後序には次のような記述がある[6)]。

…予謂はく、愚蒙音韻に暗く、何ぞ他に正しきを得んや。幸に先賢の示諭有り。以て師と為すべし。若し猶ほ五音清濁の未だ明らめぬ者有るに至りて、韻書を以て亀鏡と為す。…（巻下・31オ6～8、原文は縦書きの漢文。傍線は筆者による。）

ここで日遠は「字音は先賢の教えに従うけれども、五音清濁がわからない場合には韻書を手本とする」と述べている。この後序にもあるように、『随音句』においては数々の韻書・韻図が字音を定める根拠として引用されるが、その中でも特に『韻会挙要』が重用されている[7]。

『韻会挙要』は中国元代に熊忠によって編纂された韻書である。この書では同一韻の内部が

○公　沽紅切 角清音 …○空　枯公切 角次清音 …○東　都籠切 徵清音（巻1・2ウ2～4ウ1、原文は縦書き。以下同じ。）

のように「角（牙音）・徵（舌頭音）・宮（唇音）・商（歯音・舌上音）・羽（喉音）・半徵商（来母）・半商徵（日母）」の七音の順に配列され、七音清濁が反切とともに明示されるという等韻学的手法が採用されている。そのため他の韻書と比べて清濁や頭子音がわかりやすい。

日遠は『法華経』の字音と意味との関係を論じるのに韻書を利用したが、その中でも『韻会挙要』は字音を知るのに特に便利であったものと考えられる。漢字の頭子音や清濁を知るためには『韻鏡』のような韻図もまた有用であるが、韻図では字音と意味との関係がわからなかったのである。

また『韻会挙要』では『説文解字』『爾雅』『広韻』『増韻』（毛晃『増修互註礼部韻略』）等の出典が表示されている。掲出字についてそれぞれの典籍の注文が掲載され、いわば「虎の巻」のような形になっているのである。これもまた日遠が『法華経』の字音と意味との関係を論じる上で有用であったに違いない[8]。

2.2　字音改変について

日遠は『韻会挙要』『韻鏡』等の韻書・韻図を利用する中で、伝統的な法華経読誦音の清濁・頭子音・音形を韻書の字音に合うように積極的に改変している。この点で『随音句』は、それ以前の天台宗系統の、例えば心空[9]の音義とは全く異なる。『随音句』で音注が施される294字のうち、清濁・頭子音・音形を心空『法華経音義』から改変したものは96字に及び、全体の約3分の1が改変されていることになる。

一方で心空の字音が韻書と異なる場合でも、日遠は16字については「今更難改」としてあえて改変していない[10]。

2.3　声調について

先に1.2で述べたように、伝統的な法華経読誦音と韻書では声調に体系的な違いが見られる。この現実に直面して、日遠は声調をどのように扱ったのであろうか。清濁・頭子音・音形と同じように、韻書に合わせて法華経読誦音を改変したのであろうか。

この点に関しては、同じ日蓮宗の僧である久成院日相（1635-1718）の『法華経音義補闕』（元禄8年成、1695、元禄11年刊、1698）に興味深い記述がある[11]。

重師、遠師ハ、四声ヲタヾシテ遊シタル由シ、御筆記ニモ見エタリ。我等如キノ之者ノハ四声ヲ糺シテヨマン事及ナキ事也。セメテハ、舌歯二音ヲタヽシテヨマント思ヒ…（巻2・2オ2～5、原文は縦書き。返り点は読み下してある。）

重師（日重、日遠の師）・遠師（日遠）は四声（声調）を正して読んだが、我々には四声を正して読むことはできない、と日相は述べている。この記述は日遠の声調の区別を、日相が理解できなかったことを示している。

日相の『法華経音義補闕』は日遠の『随音句』を「補闕」するという目的で編纂されたものである。従ってその内容も『随音句』を受け継ぐところが大きいが、声調に関しては必ずしも『随音句』と同じではない[12]。日相の頃には読誦音の声調は形式化しており、特に日蓮宗の教学で伝統音の声調を受け継ぐ必要はほとんどなかった。そこで日相は画一的に『韻会挙要』等の韻書の声調に従っているのであるが、日遠の方は必ずしもそうではなかったようである[13]。

3 『随音句』における声調の実際

では実際に日遠が『随音句』において声調をどのように扱っているか、見てみることにしよう。

3.1 声調に関する記述

『随音句』において呉音（法華経読誦音）と韻書の声調について述べているのは、次の一箇所だけである。

天（平）中（平濁）天（平）文　昔、呉音ノ平声ハ漢音ノ去声、漢音ノ平声ハ呉音ノ去声ト約束シテ、呉漢ノ平去、ウラチカヒニ之呼ヒ来レリ。故天人天龍等、皆去音之呼、今ノ天ノ字、亦去音ニ読ム也。…（巻上・8ウ9～9オ2、原文は縦書き。返り点は読み下してある。以下同じ。）

ここでは呉音と漢音で平声と去声が入れ替わることが述べられている。（この漢音は韻書の音と同義と考えて差し支えない。）やはり日遠にも、呉音と韻書の声調の違いについての認識はあったのである。

3.2 韻書および法華経音義との対照

では日遠は実際に字音を定めるに当たって、この両者の声調をどのように扱ったのであろうか。ここで『随音句』における声調注を具体的に見ていくことにする。

3.2.1 考察の対象と調査の方法

『随音句』において声点または声調に関する注が与えられているのは、143字であ

る。(異なり字数。延べでは263字である。ただし入声字を除く。また清濁・音形等の議論の過程で声調が挙げられているだけのもの、韻書の韻目が挙げられているだけのものは除く。) これらの声調を考察の対象とし、韻書および法華経音義の声調と対照させることによって調査を行う。

2.2で述べてきたように、日遠は『随音句』編纂に当たって一方で『韻会挙要』を参照し、一方で心空の『法華経音義』『法華経音訓』を参照していた。従ってここでは『随音句』における声調をこの両者と対照させることにする。また参考までに、日遠と同時代の快倫『法華経文字声韻音訓篇集』との対照も行う[14]。

3.2.2 対照の結果

対照の結果とその内訳は、以下の通りである。

○心空・快倫と『韻会挙要』とで一致しているもの――――――――――― 34字

駄(上3ウ2他)・稚(上4ウ1)・蓋(上6オ8)・軒(上6オ10)・分(上8オ10他)・待(上9オ5)・請(上10ウ6他)・平(上14ウ1他)・正(上14ウ1他)・蹲(上20ウ2)・埵(上20ウ2)・蓬(上22オ5)・鞞(上23オ7他)・逃(上25ウ9)・囚(上28オ1他)・坌(上28オ9)・難(上29オ2)・伶(上29ウ6)・滋(上32ウ2)・詣(上34ウ10他)・蹈(上37ウ9)・龕(上38ウ10)・辞(上39ウ2)・燒(上40オ2)・椎(上40ウ8)・鐘(上40ウ8)・行(上41ウ4他)・販(下2ウ2)・短(下2ウ9)・紛(下6オ10)・匿(下9オ1)・訟(下19オ7)・簸(下21ウ1)・哆(下21ウ1他)

○心空・快倫に従わず、『韻会挙要』に合わせて改変したもの――――――― 80字

婆(上4オ10他)・吒(上5オ5)・剃(上6ウ7)・懈(上7ウ8他)・經(上8オ6他)・天(上8ウ9他)・中(上8ウ9他)・比(上10オ8他)・視(上10ウ5他)・礙(上11ウ1)・尠(上11ウ8)・焚(上15オ8)・情(上17オ7)・筋(上17ウ9)・繫(上19オ1)・啀(上20オ4)・齔(上20オ4)・嗶(上20オ4)・生(上20オ10他)・長(上21オ2他)・獸(上21ウ9他)・處(上22オ7他)・僧(上23オ4他)・清(上25ウ3)・床(上27オ6他)・將(上28オ5)・欺(上29オ7)・飡(上29オ10)・君(上29ウ3)・舎(上31オ7)・聲(上31ウ1)・世(上31ウ3)・川(上31ウ4)・靆(上32オ5)・蔗(上32ウ1)・萄(上32ウ1)・心(上32ウ4)・衆(上33オ6他)・主(上35オ1)・姦(上36ウ3)・哉(上37ウ2)・價(上37ウ5)・花(上38オ5)・者(上38オ6)・固(上38オ10)・化(上38ウ3他)・罪(上38ウ7)・把(上39ウ8)・教(上42オ8他)・鎧(上42ウ10他)・暴(下1オ3)・漁(下1オ9)・捕(下1オ9)・屏(下2ウ7)・伽(下4オ8)・宮(下4オ9他)・恃(下5ウ4)・種(下6オ6他)・方(下6オ7)・數(下6オ8)・華(下7ウ3他)・皺(下8オ2)・精(下11オ9)・書(下11ウ10)・牀(下14オ8他)・山(下14ウ5)・三(下15オ7他)・品(下16ウ2他)・所(下18オ4)・推(下18オ5)・魚(下18ウ6)・耆(下21オ8)・迦(下21ウ9)・浮(下24オ10他)・

提（下24ウ5）・家（下25ウ10）・弟（下26オ10）・青（下26ウ2）・地（下27ウ5）・毳（下27ウ9）

○心空・快倫に従い、『韻会挙要』に合わせて改変していないもの――― 16字

逮（上3オ8）・子（上7ウ6他）・根（上11オ5他）・帝（上13ウ8）・陛（上19オ4）・齊（上20オ1）・吠（上20オ4）・鴦（上23ウ4）・逝（上25ウ9）・水（上27ウ1）・性（上32オ2）・蔽（上32オ6）・計（上33オ7他）・退（上36オ10）・甘（下11ウ1）・眞（下15ウ4）

○『随音句』の中で態度が別れているもの――――――――――――――― 4字

寳（上6ウ10／上37オ10／上38オ5／上41オ3／下6オ7／下16ウ10）・怠（上9オ3／上29オ7）・香（上38オ5／下7ウ3）・身（上39オ7／下10ウ10／下16オ5）

○心空・快倫・『韻会挙要』いずれにも依らないもの――――――――― 9字

咀（上19ウ6）・傳（上29ウ6）・疏（上30オ5）・蒲（上32ウ1）・稟（上32ウ5）・供（上33オ10）・點（上33ウ10）・欬（下12オ10）・痤（下22ウ4）

『随音句』において声調に関する注が与えられている143字のうち、心空・快倫と『韻会挙要』とで声調が異なるのは（一致している34字を除いた）109字である。その場合に『韻会挙要』に合わせて改変したものは80字に及び、全体の約73%が改変されていることになる。日遠の声調に関する基本姿勢は、まずは「韻書に合わせて改変」と考えて良さそうである。

しかし一方で『韻会挙要』に合わせず、心空・快倫に従っているものも16字あり、全体の約15%に及ぶ。これは決して無視できる数字ではない。

3.3　それぞれの事例について

3.3.1　韻書に合わせた例

先に3.1で挙げた「天」の例では、日遠は平声点を付していた。この字は『韻会挙要』では平声、心空・快倫では上声・去声となっている。

天　他年切 微次清音 …（『韻会挙要』巻6・14オ3　平声先與僊通）

テン…天（上去）（心空『法華経音義』8ウ7）

天（テン）（上去）（心空『法華経音訓』5ウ6）

テン　天（上去）（快倫『法華経文字声韻音訓篇集』中・35オ4）

ここでは日遠は、心空等の伝統的な法華経読誦音には従わず『韻会挙要』に合わせて声調を改変している。2.2で述べたように、日遠は伝統音の清濁や音形を韻書に合わせて積極的に改変していた。声調に関しても日遠の基本姿勢は「韻書に合わせて改変」なのである。

3.3.2　法華経音義に合わせた例

日遠が心空・快倫の方に従った例として、ここでは「逮」を挙げておく。

逮（平濁）得己利文、逮、濁音也。玄応音義云、徒（平濁）戴反云云。徒是濁音也。
韻会亦為徴濁音…（巻上・3オ8～9）

日遠は「逮」を平声濁音としている。この字は『韻会挙要』では上声および去声、心空・快倫では平声である。従って日遠は『韻会挙要』ではなく、心空・快倫に依ったことになる。

待　蕩亥切 徴濁音…　逮　…（『韻会挙要』巻13・5オ8　上声賄與海通）
第　大計切 音與地同…　逮　…（『韻会挙要』巻19・3ウ6　去声霽與祭通）
代　待戴切 音與大同…　逮　…（『韻会挙要』巻20・13ウ5　去声隊與代廃通）
タイ…逮（平）（心空『法華経音義』8オ2）
逮（タイ）（平）（心空『法華経音訓』2ウ1）
タイ…逮（平）（快倫『法華経文字声韻音訓篇集』中・15ウ6）

この「逮」であるが、実は日遠は『韻会挙要』に基づき、心空や快倫が清音としていたのを濁音に改変している[15]。日遠は清濁では『韻会挙要』に依りながら、声調では心空等の伝統的な法華経読誦音に依っているのである。

2.2でも述べたように、日遠は清濁や音形に関して「今更難改」としてあえて改変しない場合があるが、これは当時（近世初期）中国の韻書をもってしても改めることができない伝統音の権威があったためと考えられる。日遠は正しい法華経読誦音を定めるために『韻会挙要』等の韻書を利用したのであり、韻書の字音をすべて『法華経』に当てはめるのが目的ではなかった。従って、このような妥協も生まれてきたのである[16]。声調についても同様であり、3.2.2で「心空・快倫に従い、『韻会挙要』に合わせて改変していないもの」として挙げた16字については、日遠が伝統音の権威に従ったものと考えられる。

ただし例として挙げた「逮」の場合、清濁の方は伝統音から改変しているという点で趣を異にする。『随音句』において音注、声調注がともに施されている89字のうち、このように「字音の清濁は韻書に合わせて改変するが声調は改変しない例」は5例存在した。（「逮」「陛」「齊」「黧」[17]「逝」。一方で「清濁も声調も韻書に合わせて改変した例」は15例である。）前述のように、日遠は韻書の字音をすべて『法華経』に当てはめるのが目的ではなかった。この5例の場合、清濁を伝統音から改変するのが主な目的であり、声調まで韻書に合わせることは意識されていない、従ってこの声点は純粋に清濁だけを表したものである、とは考えられないであろうか。ここでの声点は一種の「清濁卓立」となっている可能性がある。

3.3.3　態度が分かれている例

同一字に対して『随音句』の中で態度が別れている例として、ここでは「寶」を挙げておく。

a　衆寶（上）厳浄文。此ノ寶ノ字、清濁、古来異義ナリ。今清（スム）ニ従フ。…又寶、韻会上声皓曰、補抱ノ切、宮清音文。尓レハ、ハウノ音也、然レトモ、是モ天下通同シテ、

ホウト用ヒ来レリ。今更改べからざるか。…(『随音句』上・6ウ10～7オ3)

b　護持法寶(去)蔵(上・37オ10)

c　應以天花(平)香(上)及天寶(上)衣服(上・38オ5)

d　諸經中(平新濁)寶(上)(上・41オ3)

e　遍於九方(平)衆寶(上)香爐(下・6オ7)

f　真珠等寶(平)(下・16ウ10)

「寶」に対して声点が与えられているものは6例あるが、そのうちacdeについては上声、bには去声、fには平声が与えられている。この字は『韻会挙要』では上声、心空・快倫では平声であるので、acdeは「韻書に合わせて改変したもの」、fは「伝統音に従い改変しなかったもの」ということになる。(bについては3.3.4で後述。)

寶　補抱切 音與巧韻飽同(『韻会挙要』巻14・21ウ7　上声皓独用)

ホウ…寶(平)(心空『法華経音義』12オ4)

寶(平)(心空『法華経音訓』5ウ1)

ホウ　寶(平)(快倫『法華経文字声韻音訓篇集』中・12オ7)

aでは「寶」について、本来『韻会挙要』の反切に従えば「ハウ」となるが、世間一般に「ホウ」と読まれ続けているために改めることができないと述べている[18]。日遠は声調は韻書に合わせて改変したが、伝統音の音形までは改変できなかったのである。また一番最後のfでは、声調についても伝統音に従っている。これも韻書と伝統音の間における日遠の「迷い」から生じた、妥協の産物なのであろうか。

この「寶」のaの例では「清濁、古来異義ナリ。今清ニ従フ」とあり、音形とともに清濁の議論もなされている。また「『随音句』の中で態度が別れている例」として挙げた他の3字のうち、「怠」も字音の清濁に問題があるものとして議論されている。(「香」「身」については特に議論はなされていない。)つまりここでの声点も3.3.2の「逮」を始めとした5例と同様、純粋に清濁のみを示し声調は意識されていないという可能性が指摘できるのである。

3.3.4　いずれにも依らない例

ここでは先に3.2.2で挙げた9字と「寶」(3.3.3のb)の声調について、一覧にして示す。

「咀」の去声を除けば、『随音句』の声調は『韻会挙要』と心空・快倫とのいずれにも従わない、いわば「空き間」に入っているように見える。

これらはいずれも字音の清濁に問題があるものとして挙げられている。例えば「寶」(3.3.3のb)もそうである。

護持法寶(去)藏文、諸經云法之寶藏文、法ノ字、ツムルハ非也。又法寶(去濁)トモ、不可讀。(巻上・37オ10～37ウ1)

3.3.2、3.3.3で挙げた例と同様、ここでの声点もやはり純粋に清濁のみを示し、声調は意識されていないという可能性が指摘できる。

	随音句	韻会挙要	心空音義	心空音訓	快倫
咀	平濁／去濁	上声語独用	上清／去清	上清／去清	上清
俜	去新濁	平声青独用	平清	平清	平清
疏	上新濁	平声魚独用／去声御独用	平清	平清	平清
蒲	去濁	平声虞與模通	平清	平清	平清
稟	去清	上声寝独用	平清	平清	平清
供	上清	平声冬與鍾通／去声宋與用通	平清	平清	平清
點	去濁	上声琰與忝儼通	平清	平清	平清
寶	去清	上声皓独用	平清	平清	平清
欵	平新濁	去声隊與代廃通	上濁	上濁	去濁
痤	去濁	平声歌與戈通	上清	平清	—

4　日遠の清濁卓立

4.1　濁音表示の起源と日遠の清濁卓立

清濁の表示で思い起こされるのが、「濁点の起源」についてである。もともと声点は純粋に声調だけを表すものであったが、次第に複声点が濁音を表すようになる。そして声調表示を捨象して純粋に濁音だけを表すようになったのが、こんにちの濁点である。濁点は、和語においては主に語頭音節に立つ上昇調（去声）と混同する恐れが少なかったため、「空き間」である右肩に付けられるようになった。鎌倉時代の『観智院本類聚名義抄』に、すでに右肩の濁点を見ることができる[19]。

3.3.4 で挙げた 10 字も、韻書の字音と伝統音との、いわば「空き間」を利用した清濁卓立表示と考えることができる。また 3.3.2、3.3.3 でも声調表示を捨象した、清濁卓立表示となっている可能性のある例があった。はたして日遠は清濁卓立を意識して声点を付けていたのであろうか。

4.2　『随音句』における濁音表示

4.2.1　「広狭」の例

『随音句』の巻末には「広狭」の表（オ列長音の開合の区別に関する表）が載せられている[20]。ここでは濁音の表示として、入声字を除いてすべて右肩に複声点（濁点）が付けられている。（入声字は右下に複声点が付く。）以下に一部を引用する。

チヤウ　頂長貞聽暢騁帳張打場丈杖定

テウ　朝潮逃鳥超彫調鵰　テフ　輙甅（右下濁）、チウ　中籌稠鍮晝住（右肩濁）

重(右肩濁) 蟲

(中略)

ハウ　放方坊 (右肩濁) 房 (右肩濁) 謗傍 (右肩濁) 舫旁 (右肩濁) 泡飽

ホウ　報賓保崩　ホフ　法乏

ヒヤウ　兵平 (右肩濁) 俜 (右肩濁) 病 (右肩濁) 並 (右肩濁) 并 (右肩濁) 屏 (右肩濁) 瓶 (右肩濁)

ヘウ　表漂飄　(巻下・29 ウ 5 ～ 30 オ 7)

ここでの声点は「去声濁音」を示したものではなく、純粋に濁音だけを示した清濁卓立表示である[21]。

この巻末の「広狭」の表は、字音の開合を問題にしたものである。従って音形やそれに伴う清濁が問題になることはあっても、声調が問題になることはない。そこで日遠は声調表示を捨象した濁点として右肩複声点を使用したのである。(ただし入声字に関しては声調が音形とも関わるので、あえて右下に複声点を付したものと考えられる。) 右肩に付したのは仮名文の習慣の応用であろう。『随音句』本文でも字音を表すのに、「ジ／ヂ…ジヤウ／ヂヤウ」(巻上・2 オ、いわゆる「四つ仮名」に関する議論) のように右肩の濁点を使用している。

それでは『随音句』本文における濁点はどうであろうか。やはり右肩に偏っているのであろうか。

4.2.2　本文中の清音・濁音

以下に『随音句』において声点が付されている延べ 263 字のうち、注釈で声調が示される 3 字 (「處」「難」「把」) を除いた 260 字の声調と清濁の内訳を示す。

	平声 (左下)	上声 (左肩)	去声 (右肩)	計
清音	62	19	40	121
新濁	34	8	16	58
濁音	56	12	23	91
計	152 (含「平去」3)	39 (含「上去」7)	79 (含「平去」3、「上去」7)	270 (含「平去」「上去」10)

これによれば、濁音および新濁が特に右肩に偏っているとはいえないことがわかる。日遠は本文中では、声調表示を捨象した濁点として右肩複声点を使用してはいない。

4.3　清濁卓立の実際

これらの結果と 3.3.2、3.3.3 および 3.3.4 で得られた結果とを重ね合わせると、日遠の清濁卓立表示については以下のようにまとめられる。

①日遠は声調が直接関与しない「広狭」においては、右肩に複声点を付けるという清濁卓立を行っている。

②日遠は『随音句』本文において伝統的な法華経読誦音の清濁を問題にする際、声調の方はあえて伝統音のものを示すことで清濁卓立を行っている場合がある。

③また日遠は韻書の声調とも伝統音の声調とも異なる、いわば「空き間」を利用して清濁卓立を行っている場合もある。

『法華経』においては字音と意味との関係が重要であり、声調も意味の区別に関わる場合がある。従って『随音句』本文中においては清濁が主要な問題にならない限り、声調を捨象した清濁卓立は考えがたい。そこで上の②③の事例は一部に留まっているのである。

5　結　語

中世まで法華経読誦音を始めとした呉音の声調は、韻書のそれとは異なるものとして伝承されてきた。日遠は『随音句』において正しい法華経読誦音を定めるために『韻会挙要』等の韻書を利用したが、その過程で伝統的な法華経読誦音の声点を韻書に合うように改変したのは、いわば当然の帰結といえる。ただし日遠は韻書の字音をすべて『法華経』に当てはめるのが目的ではなかったので、清濁・音形と同様、声調についても一部で伝統音の方に従っている場合がある。

また日遠は一部で純粋に清濁を示すために、あえて伝統音の声調に従っている場合がある。同一の字に対して態度が分かれる例があるのはこのためである。また日遠は韻書の声調とも伝統音の声調とも異なる、いわば「空き間」を利用して清濁卓立を行っている場合もある。これは巻末の「広狭」の表に見られる声調表示を捨象した濁点とともに、濁音表記の歴史を考える上でも注目してよい。

法華経読誦音の声調はこの後形式化したものとなり、日相によって完全に韻書の声調と一致したものに改編されていく。また漢字音研究の課題は「字音仮名遣い」の方へ移り[22]、声調は問題にされなくなる。近世中期に至って文雄（1700-1763）は『韻鏡』をもとに呉音・漢音の体系化を行ったが、そこでは伝統的な呉音の声調は一切意識されない。こうして呉音の声調は消滅し韻書の声調に収斂していくわけであるが、日遠の声調はまさにその過渡期に位置付けられるのである。

注

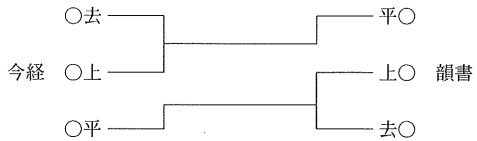
1）『法華経釈文』表紙見返しには、朱筆で次のような記述がある。（原文は縦書き。）

対馬（ツシマ）＼　　都司馬音ニハ　　対馬音

音　平声ノ字ハ　　上去字

都司馬／　　渡上去音　　渡平声

2）『法華経文字声韻音訓篇集』巻下の巻末（22ウ）には「三声翻倒ノ図」として次のような表が載せられている。（原文は縦書き。）



3）小倉肇（1995）p.838では、日本呉音（天台宗系統を中心とした法華経音義33本、法華経字音点9本による）と中国語中古音との声調の対照の結果として、次のように述べられている。

①日本呉音《平声》は、25%が中古音〈平声〉、75%が中古音〈上声・去声〉に対応する。

②日本呉音《上声》は、72%が中古音〈平声〉、28%が中古音〈上声・去声〉に対応する。

③日本呉音《去声》は、74%が中古音〈平声〉、26%が中古音〈上声・去声〉に対応する。

4）沼本克明（1986）pp.213-215参照。例えば『金光明最勝王経音義』（承暦3年写、1079）については、次のように述べられている。

その広韻の四声との対応を見ると、広韻の平声字は、この音義では平声の声点の加えられたもの六七字、上声の声点の加えられたもの六字、去声の声点を加えられたもの六四字となっている。以下、広韻の上声字は、平声二七字、上声四字、去声二八字、広韻の去声字は平声五五字、上声無し、去声三八字となっている。

5）兜木正亨（1971）参照。

6）『法華音義類聚　乾』（本満寺、1971）による。

7）『随音句』における主な韻書・韻図の引用の内訳は、次の通りである。

『韻会挙要』—105　『韻鏡』—28　『切韻指掌図』—19　毛晃（『増修互註礼部韻略』）—8

『洪武正韻』—3

このように韻書・韻図の中でも『韻会挙要』はその引用回数が圧倒的に多いことがわかる。中澤（1999）参照。

8）中澤（1999）参照。また『随音句』では『韻鏡』を補助的に利用しているが、その目的は『韻会挙要』の七音を理解するためのものと考えられる。『韻鏡』は後世文雄によって「漢字音を図面で表したもの」として正当にとらえ直されていくが、日遠はそれよりはるか以前に、実際に「反切の図」としてではなく「漢字音を図面で表したもの」として利用していた。『韻鏡』研究史の上でも、『韻鏡』を実際に学問研究に応用した早い例として注目してよい。中澤（2001）参照。

9）心空（1319-1401）。天台宗の僧で、『倭点法華経』『法華経音義』『法華経音訓』等の著書がある。日遠の『随音句』『法華訳和尋跡抄』にも「心空」の名で多数引用されており、日遠に与えた影響は大きい。

10）中澤（2000）参照。

11）『法華音義類聚　坤』（本満寺、1972）による。

12）兜木正亨（1972）参照。

13）高松政雄（1983）参照。ここでは日遠の声調について、一部に旧来の呉音の声調を残しながらも、総体的には韻書に依るという、徹底性のなさが述べられる。

14）『法華経音義』は慶安2年（1649）刊本、『法華経音訓』は至徳3年（1386）刊本（何れも日本古典全集『倭点法華経　下』所収、1934）、『韻会挙要』は市立米沢図書館蔵の応永5年（1398）刊の五山版、『法華経文字声韻音訓篇集』は大谷大学蔵本による。

15）中澤（1999）参照。

16）中澤（2000）参照。

17）「鴛」については、字音は「リ」とした上で「上声濁音」点を付している。この声点が何によったものかは不明であり、あるいは何らかの誤りである可能性もある。中澤（2000）注(5)参照。

18）中澤（2000）参照。

19）小松英雄（1981）54～73頁参照。また濁点の発生と変遷については、沼本（1997）pp.808-932に詳しい。

20）中澤（1998）参照。
21）高松（1983）ではこの「広狭」の表にある「恒」「房」「並」（いずれも右肩濁）を去声字と見なし、日遠にも旧来の呉音声点に関する認識があった証拠として挙げている。しかしこの「広狭」における複声点は（入声字を除いて）すべて右肩に付されており、これが偶然去声字ばかりが集まったものとも考えにくい。従ってここでの声点は声調表示を捨象したものと考える方が自然である。
22）江戸時代における漢字音研究の変遷については、中澤（2002）参照。

引用文献

小倉肇　（1995）『日本呉音の研究』研究篇（新典社）
兜木正亨（1971）「法華経音義の課題と日遠の法華音義書」（『法華音義類聚　乾』本満寺）
――――（1972）『法華音義類聚　坤』解説（本満寺）
小松英雄（1981）『日本語の世界７　日本語の音韻』（中央公論社）
髙松政雄（1983）「呉音と等韻学　―日遠―」（『岐阜大学国語国文学』16、『日本漢字音論考』所収、風間書房、1993）
中澤信幸（1998）「日遠の「広狭」」（『名古屋大学国語国文学』83）
――――（1999）「一七世紀初頭における『古今韻会挙要』の受容　―日遠『法華経随音句』を中心に―」（『愛文』34）
――――（2000）「なぜ日遠は伝統的読誦音を改変したか」（『訓点語と訓点資料』104）
――――（2001）「近世初期の法華経字音学における『韻鏡』の扱いについて」（『日本語と日本文学』33）
――――（2002）「『広韻』と『古今韻会挙要』　―江戸時代における〈韻書〉の盛衰―」（『名古屋大学日本語学研究室　過去・現在・未来』）
沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）
――――（1997）『日本漢字音の歴史的研究　―体系と表記をめぐって―』（汲古書院）

付記

本稿は第184回近代語研究会春期発表大会（2001年5月18日、神戸山手大学）における研究発表をもとに、まとめ直したものである。発表会場の内外でさまざまなご指摘をくださいました先生方に、感謝申し上げる次第です。

（なかざわ　のぶゆき　長榮大学応用日語学系・助理教授）